# 秋成『豫之也安志夜』の古代幻視

## ――「在五中将物語」の視点――

山下久夫

### 一

上田秋成の『豫之也安志夜』は、いうまでもなく寛政五年（一七九三）に自らの校訂で刊行した賀茂真淵『伊勢物語古意』全六冊に付刻されたものである。伊勢物語の中から適宜語句を抜き出し、真淵その他の注釈者の見解を織り混ぜつつ注釈する。したがって、一般には真淵の論を意識しつつ展開された伊勢物語論とみられよう。しかし、実は必ずしも真淵の『伊勢物語古意』をはじめとする従来の伊勢物語研究と正面から向かい合っているわけではない。確かに、真淵の説などを引用したり批判したりしているが、それらと同じ土俵に立っての自説展開は放棄されている感がある。代わりに、論の展開において顕著なのは、秋成独自の文脈の形成と固有のモチーフだ。[1] 真淵の説を逐一取り上げ自らの見解を対置していった建部綾足の『伊勢物語古意追考』などとは、明らかに違う。

そこで、本稿では、『豫之也安志夜』に伊勢物語論に関する学説の当否や同時代の説との影響関係をみるのではなく、秋成が独自の文脈を作り上げる際の記述の仕方に留意したい。そして、そこにうかがえる秋成自身の秘められたモチーフを明るみに出すことを心がける。もっとも、中野三敏氏、中村博保氏等によって、寓言説や発憤説に基づく物語論を『豫之也安志夜』に見出そうとする試みはすでになされている。[2] しかし、秋成に即した場合、問題はもっと深められてもよい気がする。すなわち、寓言説や発憤説は、彼の古代像と関係させるとき、もっと明確なテーマを浮かび上がらせるのではないか。同時にそれは、『春雨物語』の世界と大きくかかわってくるに違いない。

### 二

此物語の題、故は在五中将物語といひけんが、伊勢物語とはしばらく後なる人の、別号にや称出つらんとおぼゆる也。其

由は、此文に妹のいとおかしかりけるを見て云云の条の注に、源氏物語の総角の巻に、在五が物がたりといふは、たゞに此ふみを云也。又狭衣に在五中将の日記と云も、またく源氏の文をうけて、一つ事をいへるなれば、日記とは既に其比物がたりと云を訛れるなるべしといはれたるによるに、当時某等（そのかみそれら）のふみに、在五中将の日記、又ざい五が物語などいへるにつけて、私にしか思ゆる也けり。

研究史上では必ず触れられた伊勢物語の成立経緯や題号についての議論だが、今は、秋成説の当否は問わず彼自身の記述の仕方に注目しよう。冒頭の「此物語の題、故は在五中将物語といひけんが、伊勢物語とはしばらく後なる人の、別号にや呼出つらんとおぼゆる也」をみると、①元来の題号は「在五中将物語」であること、②「伊勢物語」というのは後世の者たちによる別号であること、の二点を自説として淡々と述べているにすぎないかにみえる。が、秋成の場合、真淵の説などをあげながらの以下の記述が、すべてこの文脈に沿ってなされているという点をもっと重視すべきである。①と②の関連を記述する中にこそ、秋成のテーマが潜んでいるからだ。

まず、自説の論拠を示すために、秋成は真淵の説をあげる。すなわち、「源氏物語の総角の巻に、在五が物がたりといふは、たゞに此文を云也」、あるいは狭衣物語の文は源氏物語の「総角の巻」に依拠して「在五中将の日記」と記しているのだとする真淵の説、これを秋成は「在五中将物語」が元来の題号だったという話の根拠に引用しているのである。真淵の説は、『伊勢物語古意』巻三に「在五が物がたりと云は、此文を云也、定かに在五とさしていふも、物語と云からは嫌ひなし、在五が日記といふ事は、其比すでにあやまれるなるべし、又日記は前に有しにやといふ人も侍れど、事のさま、此文の事を源氏に書たるを、又うけてさ衣に書たれば、別の物ならぬを知べし」[3]とある通りなのだが、真淵は、源氏物語「総角の巻」の言う「在五が物がたり」とは伊勢物語を指すのであり狭衣物語に「在五が日記」とあるのは当時既に誤った呼称が存在した証だと言っている。つまり、主旨は、あくまで〝「在五が日記」という呼称は誤りだ〟とする点にある。秋成は、それを〝「在五中将物語」こそ元来の呼称である〟という文脈に利用するのである。続いて、物語が中の主たる人物の名を題号としている例として、「竹とりの翁」「うつぼの俊蔭」「はこやの刀自」「かたのゝ少将」「おちくぼの君」「光源氏」をあげるが、これらの例から考えても「在五中将物語」の呼称こそが正しいというわけだろう。続けて言う。

又さらしなの記に在五中将の集と有は、其比まではさるふみも有しか。さらば或説に、在五中将の物語の余（ほか）に、ざい五が日記、又集てふ物も有しにやと云も、しひて悪（にく）むまじき事也。

たぶん真淵は、「ざい五が日記」「在五中将の集」といった作品の存在は認めないだろう。「或説」（五井蘭洲の説）を必ずしも排斥しない秋成は、それに同意してはいないことになる。だが、学説の問題ではなく記述の仕方として考えたとき、秋成の場合、

「在五中将物語」という呼称をもつ作品の存在をしっかりと守っていることがわかる。それは決して「ざい五が日記」「在五中将の集」と混同されるものではなかった。「ざい五が日記」「在五中将の集」の存在を容認してもよいが、これらの中に「在五中将物語」と呼称されるものが解消されてはならない。むしろ、他の存在を否定しないのは、「在五中将物語」の独立性を強めるためであるとさえ言える。

以下、日記は作り物の寓言たる物語と違い年次のままに自分の行状を記したものだから「むかし男云々」で始まる「在五中将物語」とは異体である、ただ栄花物語のみは日記体なのに物語としてあるのは世にあることを記しているが「時をはゞかりて書の題ばかり、そら言のためしなる物がたり」と書きつけたのではないか、と推測する。例の物語寓言説なのだが、必ずしもここでそれを全面的に展開するわけではない。中心は、やはり「在五中将物語」こそ元来の呼称だとする点にある。次に話は先述の②に移る。

さて伊勢物語てふ名も、源氏の絵合の巻に、いせ物がたりに正三位を合せて、まだ定めやらず、と有を見れば、はやく其比にはしかよびし事のしるきもて、此文作りてしばらくの世の別名ならんとは云也。さるを後ゝの人は、しかのみ称ぶ事となれる由をおもふに、伊勢の国へ狩の使にいきけるに、斎宮なりける人と密事有し物語を、いともはかなげに作りなせしがおもしろしとて、伊勢物語ともいひはやしつらんを、後には在五物がたりてふ名は忘れにて、いふ人もなくなん成にたるを憶ふに……

「伊勢物語」という題号の由来に言及するのだが、秋成は、源氏物語「絵合の巻」を証としながら、書かれて間もない頃にすでに「伊勢物語」の名が（在五中将物語の）別号として存在したとする。そして、「伊勢物語」の呼称だけが用いられた理由を、後世の人々が業平と斎宮との密事を興味本位に言いはやし立てたところに求めている。そのため、「在五中将物語」の名は忘れられてしまった……。

さて、①と②について述べた右の文において核心をなすのが、元来の題号と信じた「在五中将物語」の存在なのは明らかである。「ざい五が日記」「在五中将の集」などではなく「在五中将物語」であること、別号だったはずの「伊勢物語」の呼称が後の世に一般化したために「在五中将物語」という題号が忘却されたこと等を主張する秋成から、「在五中将物語」への固執を見出すのは容易だろう。勝倉壽一氏は、他が「伊勢物語」のみを考究の対象としてきたのに対し、秋成の論が「在五中将物語」「在五が日記」「在五中将の集」などの名称の存在根拠をも視座に据えたところに研究史的意義を認めている。古来「伊勢物語」という題号の由来に関しては、勝倉氏がまとめるように[4]、僻言説、歌人伊勢作者説、和泉式部本の伊勢斎宮の段初段による命名説、妹背物語（「伊」は女、「勢」は男を表すとする）説、伊勢斎宮の段が最重要であることによるとする説等があった。しかし秋成は、そうした学説とはあまり交渉しようとしない。したがって、研究史的意義を認め

られるのは秋成にとって名誉なことだが、今それを離れた立場から接するとき、「伊勢物語」の呼称を用いず日記や歌文集とも明確に違うところの、まさに「在五中将物語」という名をクローズ・アップする記述となっている点が大そう興味を惹くのである。

## 三

ならば、「在五中将物語」の名に固執する意味はどこにあるのだろう。結論めいたことを先に言ってしまうと、たぶん秋成は、「在五中将物語」という視点で臨まなければ決してみえてこない相を記述したかったのだと思われる。「伊勢物語」の呼称を自明としていては描けないものを考えたに違いない。それは、いったい何か。

まず、有名な寓言説や発憤説に基づく物語論がある。先にあげた箇所でも栄華物語に関連させて述べられていたが、特に伊勢物語百二十四段「むかし、おとこ、いかなりける事を思ひけるおりにかよめる……」を扱った『豫之也安志夜』の末尾は、秋成流の寓言説や発憤説を示すものとしてよく引用された。才能がありながら時を得ず不遇を余儀なくされている想い（発憤）を、時世を憚って昔物語に朧化し「何の罪なげなる物がたり」をするかのように記したとする物語寓言説。中国の演義小説などに比定させながら、秋成はかなり自己流の物語論を展開している。こうした物語論に関しては、すでに周知のことであり本稿であらためてつけ加えることもない。ただ、「このふみも在五中将ならぬ在五物がたりして、それにかこつけつゝ、世のさまのあまりにたはけたるをいひ刺しれるにも、……」とあるように、寓言の機能を発揮するためにも絶対に「物語」でなければならなかった点を確認しておきたい。「在五中将ならぬ在五物がたりして」という言い方に、森山重雄氏の指摘する実在人物としての発憤説（五井蘭洲の説）とは明確に異なる物語作者としての発憤説を見出してもよいだろう。[5]「在五中将物語」と呼ぶとき、やはり「物語」だという点に重きを置いているのは確かである。

しかし、ここでは、「物語」でも「伊勢物語」ではなくあえて「在五中将物語」の視点を選ぶことの意味を、もっと別のところに求めてみたい。そうすることで、寓言説や発憤説がさらに立体的な記述の中に活かされる可能性を見出せるのではないか。

これも結論めいたことになってしまうが、本稿がこれから明らかにしようとするのは、物語論が古代＝万葉集の時代を幻視することで批評性を獲得していく様子なのである。とりあえず、伊勢物語第六十六段に関する『豫之也安志夜』の評釈に注目してみよう。「むかし、おとこ、津の国にしる所ありけるに……」に関してであるが、秋成の言うところは次のとおりである。

下の条にも、津の国兎原の郡あしやの里に、しるよしゝていきて住けりと見えたり。物がたりながら、かゝる事は其由ありて書るなるべし。初めの条にも、ならの都春日の里にしるよしゝてと有。是は朝臣等の御父阿保親王は、平城天皇の第

一の皇子也。天皇御くらゐを嵯峨天皇に譲りまして、平城（ナラ）の旧京におはしましゝ、其御よせなどの有て、在原氏の領じたまふ地（ところ）も有し歟。なくとも、さるいはれの有て作れるなるべし。

『金砂』の万葉評釈もそうなのだが、原典の語順に沿った評釈ではない。評釈のスタイルを大きく逸脱し、ある語句を弾みにして自分の思いを述べていく秋成流のやり方である。さて、まず「物がたりながら、かゝる事は其由ありて書るなるべし」に留意しよう。どうやら、話は在原氏に関することであり、「在五中将物語」の視点を必要とするようだ。「かかる事」とは、むろん在原氏が摂津国の芦屋に領地を有しているということを指す。史実としての信憑性はともかく、秋成は、物語とはいえこう記されるのは何か所以あってのことに違いない、と曰くありげな口調で記す。そして、直ちに話は第一段の「平城の京、春日の里にしるよしして」に及び、奈良の春日の里にも在原氏の所領があったかもしれないと推測する。たとえ、「そら言」の物語ではあっても、何がしかの史的根拠がないと「しるよしゝて」などと記すはずがないというわけである。ここには、すでに後の『遠駝延五登（をだえごと）』や『金砂（こがねいさご）』にみられる歴史観――正史とて完全ではなく時の権力の都合で漏らした事実もあるが、物語がそうした遺漏の事実を記している場合もあるという歴史観――につながる要因が十分感じられる。物語は、それまでの寓言説から、歴史認識の方法にかかわる次元に射程を延ばしているかのようである。

さらに、業平の父阿保親王を介して、嵯峨天皇に皇位を譲って平城京に赴いた平城帝が登場すると、当然『春雨物語』の「血かたびら」が想起されよう。かつて述べたように[6]、筆者は、『春雨物語』の「血かたびら」→「天津処女」→「海賊」の展開の中に、「御国ぶり」の変容というテーマを見出すべきだと考えている。真淵の提唱した万葉の「ますらをぶり」が嵯峨天皇の漢文化政策によって次第に失われていく過程で生じた状況、登場人物は皆その一コマを演じている。「血かたびら」の平城帝は、神野親王（嵯峨帝）との譲位をめぐる緊張の中で「朕はふみよむ事うとければ、ただ直きをつとめん」と考えた。漢籍（漢文化）に対する〝直き心〟の暗黙の抵抗がある。

『豫之也安志夜』での「しるよしゝて」の解釈で、在原氏の所領地の可能性について「さるいはれの有て作れるなるべし」と推測することは、そこに『春雨物語』の平城帝の抱えた問題に通底する何かが秘められていることを意味しよう[7]。その際、「物がたりながら、かゝる事は其由ありて書るなるべし」が、具体的に何を想像して「其由」と言っているのかはわからない。が、少なくとも、理想の古代が失われていく「御国ぶりの変容」というテーマと「在五中将物語」とが無関係ではないことを示している。以後、『豫之也安志夜』の記述は、阿保親王について記した『続日本後記』の「親王（ハ）素性謙退、才兼二文武一（ツ）、有二膂力一、妙（ナリ）二絃哥一（ニ）……」に触れ、承和の変で橘逸勢、伴健岑の陰謀を露見させた功績で親王が一品の位を贈られた旨国史にみえると述べた後、また次のよ

うな推測を加える。

さるは在世にも功封など給はりしにや、国史に脱し事も、哥物語等によりていにしへを知るゝ事有。津の国にも、八部、兎原二郡のあひだに、在原氏の領ぜられし地もありしにや。今も芦やの邨ならびに打出の里といふには、阿保山親王寺といふ仏宇あり。伝へて親王の廟所也といへり。又古今集に、行平卿の、事にあたりてつの国須磨におはせし事も見えたるは、いづれしるよしゝていきて住けりと書る、其よしなくてはあらじ。

最初に津の国芦屋に在原氏の所領地が存在した可能性を匂わせた後、奈良の春日の里をもち出し「血かたびら」のテーマと結びついていることを示唆した。そして、再び話を津の国に戻していることがわかる。ということは、津の国芦屋の在原氏所領地に関しても、奈良の春日の里と同じ意味づけを要請していると言えよう。津の国の所領地も、失われた理想の古代の問題と決して無縁ではないのだ。事実、「津の国にも、八部、兎原二郡のあひだに、在原氏の領ぜられし地もありしにや」と推測されるとき、この辺一帯は、かつて論じたように[8]、秋成が『金砂』の中で幻想の都〝難波の宮〟の威光を示すために浮上させようとして格別こだわった地域であった。〝難波の宮〟に御贄物を捧げるべく活況を呈する〝難波の海〟の海岸線である。秋成は、「今も芦やの邨ならびに打出の里といふには、阿保山親王寺といふ仏宇あり。伝へて親王の廟所也といへり」と言い、古今集の記事まで引き合いに出して、在原氏の所領地をこの地域に想定したわけである。

同時に、「国史に脱し事も、哥物語等によりていにしへを知るゝ事有」と言われるように、物語は明確に国史（殊に正史）の遺漏を補うもの、正史が何らかの理由で記せなかった事柄を表現するものとして位置づけられる。稿をあらためて論じなければならない問題だが、寓言説や発憤説は、単なる物語論を越えて古代を幻視しての歴史批評――これが『春雨物語』前半部の本質だと筆者は考えている――へと転換しているとも言えよう。そして、こうした相が浮かび上がるには、「伊勢物語」よりも、在原氏のイメージをより彷彿とさせる「在五中将物語」の呼称の方が有効であるに違いない。「在五中将物語」にこだわる積極的な意味は、やはりある。

## 四

秋成による芦屋の里は在原氏の所領地だったかもしれぬとの推測が、『豫之也安志夜』においては理想の古代を幻視することと無関係でないのは、以下の記述からも明らかだ。

むかし、おとこ、津の国、むばらの郡、蘆屋の里にしるよしして、いきて住みけり。むかしの歌に、

蘆の屋のなだの鹽焼きいとまなみ黄楊の小櫛もさゝず来にけり

とよみけるとぞ、この里をよみける。こゝをなむ蘆屋の灘と

はいひける。

伊勢物語第八十七段である。この段はまだ続くのだが、『豫之也安志夜』の評釈は、この箇所の「蘆の屋の灘の鹽焼きいとまなみ……」の歌にだけ関心を示して次のように述べる。

注に、万葉のしかの蜑の哥をかつ〳〵とりかへて、むかしの哥也と作れるが巧妙也といはれたり。猶強言をそへんには、其本の哥は、櫛笥の小ぐしとりも見なくにとよめるは、はろ〳〵筑紫の極に来て、こゝの蜑をとめらがなすわざを見れば、いとも悲しな、風に梳り雨に沐すてふ古言の葉のおもひ出らるゝぞかし、あやしげなる物身にまとひつるも、所ゝ肌あらはれて、打かくる高波にぬれそぼちつゝ、身は有ものともなくて、立奔るありさま、もとよりおどろ髪色もなくふり乱したるを、都のたをやめの見るめに、世にはかくても有けりと、あはれさいと切たる心によみたるなり。其はふりたる世のさまにてこそありけれ、今はさるものらまで常に乱ればかりはかき上なすにぞ、黄楊の小櫛など額にかいさして、いとなみはすなるを、けふは勤しさのあまりにや、さゝでも来にけりとよみかへて、昔の飛鳥の都人の哥もて今を思はしむる巧みにはあらぬか。

まず、真淵の解釈をあげている。『伊勢物語古意』巻五で真淵は、万葉集巻第三の「しかの蜑は羊布刈鹽やきいとまなみ髪梳の小櫛とりも見なくに」（二七八）を本歌とし、万葉集の歌は筑前の国の志賀の海人を詠んだものだが「（伊勢物語の方は）所をかへ詞をかへて、こゝの芦やの里の古哥としたるは、此文の例の事にて、ひとつの興也」とした。場所も詞も変えて詠む伊勢物語のいつもの趣向だというわけだが、秋成は、趣向ではすまさない。あえて「強言」だと断って万葉集と伊勢物語の間に存在する違いにこだわった。

万葉集の歌に対する秋成の解釈は、筑紫の果てまではるばるやって来た都人が当地の蜑乙女が髪も風雨に任せてふり乱し高波を受けつつなりふり構わずに奔走している姿を、「たをやめ」の眼で詠んだ歌だという。『金砂』三でも、この歌を取り上げ、ほぼ同じような評釈を施している。「いとも悲しな」とは言っても、秋成は、憐みの歌とは思っていない。むしろここには、質素な恰好で野生的に奔走する筑紫の蜑乙女を都人が驚きをこめて詠むという構図がある。秋成がこの構図を好んだらしいことは、「玉藻刈る海少女」に抱いたイメージをみれば明らかである。(9)

しかし、問題はここからで、伊勢物語第八十七段の歌に対しては、いささか屈折してくる。万葉集の言う都人の視線で捉えた蜑乙女の姿を述べた後、実はこれが「ふりたる世のさまにてこそありけれ」とされ、伊勢物語の今に対しては、そうした古代をもはや喪失したものとして記述されるのである。そして、伊勢物語の歌の解釈そのものに入る前に、「今はさるものらまで常に乱ればかりはかき上なすにぞ、黄楊の小櫛など額にかいさして、いとなみはすなるを」の評釈が挿入された。予め〝失われた古代〟という文脈を作った上で、伊勢物語の歌の評釈に入るわけである。こ

んな挿入を必要とする評釈は他にはない。真淵が場所や詞を変えての趣向としたものは、「昔の飛鳥の都人の哥もて今を思はしむる巧みにはあらぬか」と、「巧み」とは言っても趣向云々の問題を越え、万葉集の古代を幻視する一方今やそれは存在しないという喪失感を秘めつつ詠まれた歌のように解釈される。もっとも秋成は、喪失感による嘆きの歌だとは考えていないようだが、万葉の時代との落差を抱えた歌と解しているのは間違いない。

『豫之也安志夜』は、伊勢物語中の語句を恣意的に取り上げて評釈した書である。評釈の対象となっているのは、万葉集を中心とした古代語が多い。源氏物語と違って伊勢物語には万葉語が多いのだから当然とも言えるが、『豫之也安志夜』の視線の在処と無関係ではないだろう。

## 五

以上の事柄は、秋成にとっては、「伊勢物語」の呼称を自明とせず、元来の題号と信じた「在五中将物語」の視点に立ってはじめてみえてくる相であった。では、「伊勢物語」という呼称はどうか。秋成の記述は、そこに意味を見出してはいないのか。必ずしもそうではなく、導き出すべき問題は存在する。

「伊勢物語」の題号の由来について、彼が「伊勢の国へ狩の使にいきけるに、斎宮なりける人と密事有し物語を、いともはかなげに作りなせしがおもしろしとて、伊勢物語ともいひはやしつらんを」と言ったのは先に述べた。俎上に上るのは伊勢物語第六十九段の伊勢斎宮と業平との密事だろうが、秋成は、先の箇所に続けて、伊勢斎宮とは怡子内親王を指すとの通説を否定する真淵の見解を支持し、「（真淵が）国史に正してことわられしかば、今者誰人か此皇女にさる汚しき御名をおふせまゐらすべき」と言う。真淵が実証しようとしたのは、業平の放縦は文徳天皇の御代であり伊勢斎宮との密事云々とは時代が合わないということであったが、秋成もそれを後押ししている。

が、興味深いのはその後だ。彼は、『日本文徳天皇実録』嘉祥三年（八五〇）七月九日の条の記事（晏子内親王を伊勢斎宮に慧子内親王を加茂斎宮にした記事）と天安元年（八五七）二月二八日の条の記事（賀茂内親王慧子を廃して無品述子を立て右大臣藤原朝臣良相を遣わして事の次第を神社に報告したが、これは秘事とされ誰も知る人はなかったという記事）をあげた上で、次のような推測を加えているのである。

さるは此加茂のいつきの廃られたまひしも、同じ御時の事なれば、もしやは朝臣と物らいひ寄よみかはし給し事を露（あらは）されて、斎宮（いつきのみや）をまか出させられたまひし、其由神に告（まう）させたまへるものか。されど深くおぼし恵（めぐ）ませ給ふてや、何の故とも世にはあらはさせたまはぬを、京童べのしか〳〵の事有てよなどいひさやめけるを摘て、此文には作りなせしが、猶秘したまへるを、其御かたと指ん事後の世ながらもはゞかりて、賀茂のいつきを伊勢にとりかへなどして、あらぬさまに記者

の巧めるを、世の人殊におもしろしとて、伊勢物語とはひとつの名にやよびけん。

どのような経緯で「伊勢物語」と呼ばれるようになったのかに、結構こだわっている様子がうかがえる。賀茂斎宮が廃された記録から、密事は本当は賀茂斎宮と業平との間のことであり、時世を憚った記者が「伊勢」に取り替えたのを後世の人々がもてはやした結果「伊勢物語」の名が定着したのかもしれない……とは、いささか勘繰りすぎというものだろう。真淵は、上記の『日本文徳天皇実録』天安元年の記事をあげ、もし伊勢斎宮（怡子内親王）に密事があったのなら賀茂斎宮と同じように廃されたはずなのにそんな記事はないと述べ、国学者らしく皇族への恐れを以て怡子内親王の潔白を立証しようとした（『伊勢物語古意』巻四）。秋成だって、その点は真淵を継承する。が、加えてここには、「伊勢物語」と呼ばれるようになった経緯を見届けようとする意識がある。

したがって、秋成の場合、「在五中将物語」の視点を強調するからといって、後世の「伊勢物語」の呼び名は無意味だと二元論的に裁断するわけではない。「在五中将物語」からの推移をみつめようとしているのだ。しかも、その中で、主旋律のように響くのは、「深くおぼし恵ませ給ふてや」「はゞかりて」「あらぬさまに記者の巧めるを」といった、世間を憚っての朧化表現への理解である。『豫之也安志夜』の末尾に「（憤りがあっても）たゞ今の世の聞えをはゞかりて、むかしの跡なし言に、何の罪なげなる物がたりして書つゞくるなん」とあるが、まさにそうした物語論が「伊勢物語」なる題号の成立する経緯にも貫かれているわけだ。秋成にとって、「伊勢物語」からはもはや「在五中将物語」のような古代幻視は期待できない。しかし、どのようにして後世の「伊勢物語」なる呼称が成立したのかという問いかけだけは、決して手放してはいなかったのである。

## 六

こうした秋成の物語論と古代幻視との関係を、どう意味づけたらよいのか。最後に、中村博保の物語論を甦らせて、『豫之也安志夜』固有のモチーフの意味を理解する一助としたい。中村は言う。上代の詩が質朴な人間性を即物的に表現しているのに対し、中国文化の移入とともに成立した後世の書は、「時にあはぬ才ある人」の主体意識の成立と重なっており、当然それは国が栄え人心が華美になった後世においては、表現の技巧や華やかさに対する留意として現れる。秋成は、表現の巧みに腐心しながら、上代においては見られなかった自我によって文章が書かれるようになったこと（「書は憤りより書きもする物にいふ」）を、歴史の運行とともに喪われなければならなかった質朴の風に対する代償として、「歴史」の立場から相関的に認めているのである……と。[10]

主体意識の成立に比重をかけるやや近代主義的な匂いは除くにしても、物語の寓言や発憤を主体意識と捉え、しかもそれが上代の質朴な風の喪失を代償として得られたものであるとの指摘は有

益だ。喪失感を自覚した物語論として甦ってくる可能性がある。加えて秋成には、物語の発生する後世の華美な文化的環境の増大を、歴史の必然として不可避的に受け止める意識が確かにある。決して、理想の古代から華美な後世を裁断するような二元論に立っているわけではない。二元論の代わりに華美なる後世への推移を不可避と受け止めるからこそ、元来の題号を忘却して「伊勢物語」と呼ばれるようになった経緯にまで言及する必要があったのである。とすれば、物語は、理想の喪失をバネとして成立し、イロニー（中村物語論のキーワード）を以て万葉の古代とかかわっていることになる。

今、筆者の言葉に言い直せば、これは物語が古代の幻視により批評性をもつことを意味する。それは、古代を理想化して後世を裁断するだけでは生まれない。理想をまず掲げた上でそれが失われていく過程をこそみつめるのが、批評の眼である。『豫之也安志夜』が「在五中将物語」と「伊勢物語」の両方に言及するのは、その眼をもって記述しているからである。そして、たぶん『春雨物語』の「物語」にも、そうした批評性の意味が込められていたに違いないのである。

注

（1）秋成には、香具波志神社蔵の写本として残る『よしやあしや』の著があるが、こちらは真淵や契沖の説を載せることが中心で、自説はさほど展開していない。

（2）中野三敏「寓言論の展開」（『戯作研究』所収、中央公論社、一九八一・二）、中村博保『上田秋成の研究』（ぺりかん社、一九九四・四）Ⅰの五「秋成の物語論」、勝倉壽一『上田秋成の古典学と文芸性の研究』（風間書房、一九九四・六）第一篇第四章「『予之也安志夜』の研究史的意義」等々。

（3）『伊勢物語古意』の本文は、秋成校訂の寛政五年版を用いた。但し、句読点を適宜施した。

（4）以上、勝倉『前掲書』（注2）。

（5）森山重雄『秋成　言葉の辺境と異界』（三一書房、一九八九・五）「『癇癖談』の中心と辺界」。

（6）拙稿「上田秋成の古代観と〈歴史〉」（『枯野』第十一号、二〇〇〇・十一）。

（7）真淵の『伊勢物語古意』も、「しるところ」を所領地の意味としているが、単に語の解釈に留めており、秋成のように平城帝に連想を及ぼすような評釈ではない。

（8）拙稿「秋成・摂津国西側沿岸へのこだわり」（『國語と國文学』七六巻第一号、一九九九・一）。

（9）拙稿「秋成の記述する〈古代〉」（『江戸文学』二二、二〇〇一・二）

（10）中村『前掲書』（注2）Ⅳ「思想と文体」。

※秋成の説は、すべて中央公論社版『上田秋成全集』によった。

（やました・ひさお　金沢学院大学教授）